

こども食堂 オジサンも輝く 経験生かして社会と橋渡し

2021/5/13付 | 日本経済新聞 夕刊

地域の子どもたちに食事や居場所を提供するこども食堂。食堂やボランティアは増えているが、中高年男性にはまだまだ敷居が高いのが現状だ。でも心配無用。料理ができなくても、子どもとの接し方がわからなくても、オジサンの活躍の場は広がっている。



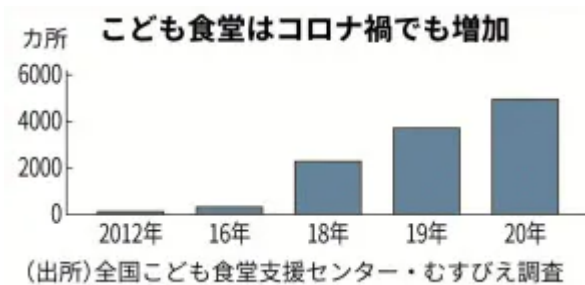
子どもたちと接する渋谷さん（20年12月、福島県会津若松市）

渋谷雅人さん（53）は住友商事に勤めていた2016年、仙台市のこども食堂の活動に参加した。商社の仕事は充実していたが、妻に先立たれ、脳腫瘍を患っていた息子の友雅さんとともに「もっと自由に、やりたいことができる人生を送りたい」と思っていた。

当初、様々な悩みを抱える子どもたちに自分は何ができるのかと自問自答した。そんな悩みを消してくれたのが、4歳の女の子だった。

「しゅっち、ギュッとして」。帰り際にせがまれて、やさしく抱きしめた。女の子の不安な気持ちに、自分が少しでも寄り添えたと思えた瞬間だった。「社会課題に向き合い、様々な人と一体感を持って時間を過ごす心地良さは、会社員時代には得られなかった」と言う。

17年に会社を辞め、NPOの資金を調達するファンドレイジングを学んだ。「声なき声、共感がお金の循環を生み出すこの手法は、社会を変える武器になる」と確信した。専門用語が飛び交うNPOの活動をかみ砕いて説明し、支援企業や行政との橋渡しをしていった。「こども食堂の垣根を低くするのに、企業での経験値が生きる」と自信が持てるようになった。



息子の友雅さんも闘病しながら、こども食堂やSNS（交流サイト）で交流を広げていった。18年、東京で開かれた世界こどもサミットでスピーチをした。その時の「人生に本気で生きてほしい、自分に正直に生きてほしい」とのメッセージは、今も渋谷さん自身の励みになっている。

友雅さんは19年、18歳で亡くなった。渋谷さんは山形市の実家に戻り、経営コンサルタントの仕事をして、各地のこども食堂を支援するプロジェクトに関わっている。「目の前の課題を放っておけない仲間との出会いが加速度的に増えた。この仲間とともに山を登り続けることが息子との約束だから」と話す。

千葉県市原市の川瀬敦嗣さん（33）は19年12月、7年間勤めた食品メーカーを退社した。研究開発部門で働いて、食品ロスや食料の安全保障に興味を持ち、「食の知識・経験を海外で生かしたい」と青年海外協力隊に応募。発展途上国への派遣が決まったが、新型コロナウイルスの感染拡大で渡航は中止になった。

たまたまNPOとのマッチングイベントで出会い、参加したのが全国こども食堂支援センター・むすびえ（東京・新宿）だった。それまで「自分とは関係ない」と思っていたこども食堂が「多くのアクターが有機的につながり、社会課題により近いところで活動している」ことに驚いた。

こども食堂も企業・団体、行政との連携が広がり、活動は多様化している。食料を寄付してもらったフードバンクやフードドライブのほか、遺贈寄付、休眠口座預金の活用といった新たな支援スキームも生まれている。むすびえには企業や官公庁で働いていたシニアも参加しており、それぞれの得意分野で活躍している。

川瀬さんも企業との折衝、各種プロジェクトに携わりながら「こども食堂のようなムーブメントを海外でも起こせたら面白い」と新たな夢を膨らませる。

(杉野耕一)

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.